

ヤマト王権は鉄を使って勢力を広げたって本当？

5世紀中期の古墳から、しばしば短冊形の鉄の延べ板がまとまって出土することがあります。近年の成分分析や形状の観察から、この鉄の延べ板は朝鮮半島、とりわけ金海^{キムヘ}や釜山^{プサン}周辺からもたらされたものである可能性が高いとされています。鉄は、この当時から、鉄製の農具や武器に使われるようになり、生産力の増大や勢力の拡大に不可欠なものであったため、各地の豪族たちは、鉄をたいへん重要視していました。しかし、当時の日本列島には、製鉄技術はまだなく、朝鮮半島から安定して鉄素材を供給する必要がありました。ヤマト王権は、朝鮮半島からの鉄素材供給ルートを掌握することにより、その配分をコントロールし、各地の首長らに対して優位に立つことができました。各地の有力首長も、鉄素材の入手ルートを把握しているヤマト王権の権力秩序に加わる必然性があったと考えられます。こうしてヤマト王権の勢力は、各地に広がっていったと考えられます。

鉄砲は、平和な江戸時代には消えた！？

戦国時代を劇的に変化させた鉄砲は、平和な江戸の世になると、ほとんど日常では使われなくなりました。そのため、鉄砲鍛冶や火薬製造元の仕事は少なくなり、その技術は平和な時代に合わせた形で継承されていきました。火薬の技術は、上向きに打ってその火薬のひろがりを見賞する、つまり「花火」という新しい芸術を作りだしました。とくに三代将軍家光は花火好きで知られ、花火を奨励したこともあり、現在の「隅田川花火大会」へ継承される「江戸両国川開き花火大会」が万治年間（1658～61）に始まりました。この花火大会は、江戸の夏の風物詩となり、レジャー産業をも形成し、花火は日本を代表する文化となりました。また、鉄砲鍛冶の技術は、ネジやパイプの製造に受け継がれ、からくり人形や和時計をつくりだしました。このような日本独自の優れた伝統的な技術は、現在につながる技術大国日本の基盤ともなったのです。